

デザイナーのための経済コラム(23)

再び閾値(いきち・しきちthreshold level)について

<https://ja.wikipedia.org/wiki/しきい値#概要>

超えてはいけない危険な、一線。超えなければならない一線。超えると状況が一変する一線。21年の11月号に閾値について書きました。今回は別の切り口で考えたことを紹介します。閾値は前回のコラムで紹介したように化学や物理で変化する数値の境目をさす専門的な用語です。この考え方を産業の中では別の表現をしています。品質管理の手法に7つ道具があり、その中に管理図があります。管理図は管理しなければならない事項の数値を確認することで管理します。商品を生産する工程にはさまざまな目的のために管理しなければならない項目があります。仕事の内容、立場の違いによっても、誰もがやっていることだと思います。

一番身近で、重要な閾値、管理値は個人の健康状態、財務状況だと思います。健康状態は体温、血圧、呼吸数、食欲、顔色、排便で概要は把握できます。さらに詳しく把握するのに、血液検査で血糖値、コレステロール値など各種のデータを確認します。それらのデータは標準値、最低値、最高値など適正な範囲が経験的に示され、健康診断が格段に進歩しています。

個人の財務状況指標の古典的なものはエンゲル係数です。総支出の中の食費の割合を%で言います。最近では飽食の時代、グルメなど食習慣も多様になり、この数値はあまり使わなくなり、可処分所得に変わったようです。ただし、まだ発展途上国の場合は重要な指標かと思っています。個人の財務では貯蓄率などが基本的な管理値かと思っています。貯蓄の中身、財産の種類と配分が引退した人たちには現金(不通預金)、証券類、不動産の配分を均等にすることが重要だと言われています

日常過程生活の中でも、個人の生活の中でも、この考え方は有用で、知らず知らず使っています。計測単位、計測機器がない時代、場所、状況では、昔の人に限らず人は、感をはたらかせています。機器や勘がくるってくると、事故発生の予知を見過ごしたり、事故やけがをします。

閾値は数値で表記しますが、定性的感覚的な事柄は数値を代替することがあります。

病院で聞かれることで、痛みがどの程度なのかを伝えるのに、「10段階でいえば、どの段階ですか」と聞かれます。「痛みは」脳神経の電流や、ホルマンの分泌量変化なので測定できるかもしれませんが、時間もコストもかかります。医者はおおよその程度を知りたいのであれば、口頭の返事で間に合います。

閾値の概念を系として、体系として、もっと拡大してとらえることができますが、必ずしも数値で表現できるとは思いません。化学、物理、経済、生産性も系として考えることで、その中で閾値が鮮明に、詳細になっていきました。ジャーナリズムの世界では、鉄則ともいえる系があります。「5W1H=What、Who、Why、Where、When、How」です。どこまで、この系をたどれるか、どこまで記述できるかがジャーナリズムの質になります。

「5W1H」はジャーナリズムの鉄則ですが、どの分野、どの業種でも、どの時代でも有用な概念です。冷徹に仕事を遂行しようとするれば、「5W1H」は避けて通れない条件です。しかし、これは必要条件であって、十分条件ではありません。何が十分条件になるのか、古来から追求してきました。それは感情の系、倫理の系、美の系、善悪の系だと思います。これらの閾値は極めて変容しやすいように思います。また個人差、集団差が大きいように思います。この格差は永遠に解消できないように思います。

悲しいことに、個人間、企業間、組織間、個人と組織間、国家間での喧嘩、訴訟、過失、紛争、戦争も未来永劫なくならんと覚悟し、覚悟して、諦めずに生きることが必要になるのかと思います。

以上。

(T.K.)